

## 「叱ること」についての臨床教育学的考察

吉岡 恒生

障害児教育講座

### “Scolding” from the Viewpoint of Clinical Education

Tsuneo YOSHIOKA

Department of Special Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### 要 約

本論は、臨床心理士の経験と知識を踏まえて、教育現場の問題に主体的に参画し、教育の場における問題を検討していくという臨床教育学の視点から、「叱ること」について論じたものである。実践報告という形式を取り、ある小学校での保護者向けの子育て相談会と教員向けの研修会において、筆者が講師として「叱ること」について当事者との対話を通して検討していった。保護者との間では、「きょうだいのなかで叱ること」「どこまでを叱るべきなのか」について、教員との間では、「叱ったあとの失敗感を分かち合う」「叱られたら子どもも苦しむ」「子どもの変容についていけない大人たち」「子どもの言い訳を封じてはいないか」「叱ることができない悩み」「発達障害児への特別な叱り方はあるのか」「それぞれの子どもに応じた叱り方」「自分のことを棚に上げていないか」などについて検討がなされた。

Keywords : 叱ること、臨床教育学、臨床心理学

#### 1. はじめに

新堀（2002）は、「わが国において臨床教育学という名称は最近、かなり普及するようになり、それへの関心や期待も高まりつつあるが、未だ定着した概念規定はなく、文字通り萌芽の段階にある」と述べている。臨床教育学論は、大きく分けて、臨床心理学の実践家が教育の場の現象に焦点を当てる「心理学系の臨床教育学論」と、教育学に出自をもつ学者が提唱する「教育学系の臨床教育学論」がある。筆者自身は、特別支援学校教員養成課程を担当する大学教員ではあるが、発達支援相談室等で臨床活動を行う臨床心理士であるため、広い意味での臨床実践に基盤を置いた臨床教育学を展開していきたいと考えており、その方法論は「心理学系の臨床教育学論」に属するであろう。わが国における臨床教育学の制度化に当たっての功労者の一人である河合（1995）は、「数多くの臨床教育学があっても不思議ではなく、むしろそれを期待する」と述べているが、筆者も、研究者それぞれがもつ背景、置かれている立場から、教育実践に資する臨床教育学を模索していくことが大切だと考えている。そうした観点

から言えば、臨床心理士でありかつ教員養成大学教員である筆者の臨床教育学の方法論は、「臨床心理士の経験・知識を踏まえて、教育現場の問題に主体的に参画し、教育の場における問題を検討していくこと」である。

そこで本報告では、「叱ること」について、保護者と教師との対話を通して、臨床教育的に探っていきたいと考えている。「叱ること」は、家庭においては多くの保護者が、学校においては多くの教師が、様々に悩んでいるテーマである。それゆえこのテーマは、筆者が特別支援教育の相談役として関わってきたA小学校において、まずは保護者の悩みとして、次に教師の悩みとして、筆者のもとに持ち込まれた。そして、まずは学校が主催する保護者向けの子育て相談会のトピックとなり、次に教師向けの研修会のテーマとして取り組まれた。いずれの会合でも、「叱ること」についての保護者の悩み、教師の悩みが事前に筆者のもとに知らされ、当日、相談を希望する当事者との間のやり取りを通して、「叱ること」について理解を深めていった。本報告はそのエッセンスを記したものである。ゆえに、本報告は、ある小学校の保護者と教師とのや

り取りを通した、「叱ること」についての臨床教育学的実践報告である。

## 2. 保護者と「叱ること」

特別支援教育について保護者への理解を深めるため、筆者がA小学校の保護者向けに「発達障害」について講演したのち、学校側から、臨床心理士としての経験を生かして、子育て全般についての相談会（「心の相談会」）の講師をお願いしたいとの依頼があった。筆者が「それでは前もって保護者の悩みをいくつかアンケートで募って下さい」と依頼したところ、集まった20を超える悩みのなかで3分の1近くが「叱ること」に関わる悩みであった。そこで、「叱ること」をめぐってアンケートで悩みを訴えた保護者のなかから、筆者と聴講者の前で実際の悩みを語ってもいいという人を募り、2名の承諾を得た。「心の相談会」では、講師である筆者を囲んで半円状に席が配置され、対話しやすいよう工夫したステージが作られた。以下はその「心の相談会」でのやり取りを、Q（保護者の悩み）& A（筆者の応答）の形式に修正して示したものである。

### ①きょうだいのなかで「叱ること」

（保護者の悩み-1）

2年生の男の子です。4人きょうだいの一番上なので、けんかをして力づくでおもちゃを取ってしまったり、手が出てしまったりします。きょうだいと同じようにけんかをして、「お兄ちゃんなんだから我慢しなさい」と言ってしまうのですが、差別しているようでいけません。何を基準にトラブルを解決したらよいか分かりません。本人たちが納得のいく形で、たたきあたりせずにはげをする前に解決する方法があれば教えていただきたいです。

（筆者の応答）

私は普段、大学の発達支援相談室で発達障害児の保護者の相談を担当しています。この悩みを聞いて私は、障害児のきょうだいたちのことを思い浮かべました。障害児のきょうだいたちも、「我慢しなさい（仕方ないでしょ）」と言われることもあるし、言われなくてもそうしたプレッシャーを感じ続けていることがあります。4人きょうだいの一番上だって、障害児のきょうだいだって、我慢できないことはあるし、母親に無条件で甘えたいときはあるのです。家族の事情ゆえになかなか甘えを許容できない場合でも、甘えたいけれど甘えることができない子どもの気持ちを母親が理解し、その気持ちに応えようと努めることで、子どもの情緒が安定していくことがあります。

「叱ること」について考えるとき、とてもいい絵本があります。『おこだでませんように』（くすのき、2008）という絵本です。絵本は、主人公の小学1年生

の男の子が「ぼくは いつも おこられる」とぼやくところから始まります。家では妹を泣かせておこられる。学校ではクラスメートを殴ったからといっておこられる。しかし、主人公の側からすれば、おこられる原因になった行動にはいつも理由がある。そんなおこられてばかりいる子の心の中を描いた作品です。お話はハッピーエンドで終わりますが、これを読んで普段の自分の子どもたちへの対応を振り返ってはっとさせられたという親や教師は多いことでしょう。いつもおこってしまう親が、いつもおこられてしまう子どもに読み聞かせるのに、いい本だと思います。読後の感想は子どもに強要せず、まずは「あなたの気持ちを理解したいの」というメッセージが伝わればいいのではないかと思います。（実際の相談会では、『おこだでませんように』を筆者が読み聞かせた。）

4人きょうだいだとなかなか大変ですが、おにちゃんが穏やかに過ごしているときに、それとなく、気持ちを一对一で聞く機会を設けてみてください。学校では、他の子からいい様に扱われていららし、そのストレスを家庭で自分より弱い弟妹にぶつけているのかもしれない。おかあさんが想像されているように、「弟たちのほうが悪いのにぼくだけおこられる」と感じているかもしれない。自分の率直な思いを伝え、「おかあさんはぼくの気持ちをわかってくれている」と体感することが、のちのち自分の感情をコントロールすることにつながっていくのです。

「本人たちが納得のいく形で、たたきあたりせずにはげをする前に解決する方法」については、万能の方法では思い当たりませんが、親をまじえてきょうだいの中でルールを作ることが考えられます。就園前の子にはルールを理解するのは困難かもしれませんが、年長の子との間にルールを決めて、それを基準に叱るというのが一案かと思います。ルールは何度も破られるでしょうが、それで懲りずに、時には叱りながら、ルールをわかりやすく気長に伝えていってください。

### ②どこまでを叱るべきなのか

（保護者の悩み-2）

1年生の男の子です。どこまでを叱るべきなのかがわかりません。おもちゃの片付け、歯磨きなど、言われてもできないことがあります。子どもはわかっていてやらないのか、本当に理解できていないのかがわかりません。「まだ小さいからできなくても・・・」という気持ちと、「もう赤ちゃんじゃないんだからこれくらいのことはできるだろう」という気持ちがあり、迷います。子どもがやってみてできなかった場合は諦めますが、どのようにしてやる気にさせればいいのでしょうか。

（筆者の応答）

（母親と筆者のやり取りから、発達障害の診断は出

ていないものの、いわゆるグレーゾーンにある子どもであることが推測された。)「どこまでを叱るべきなのか」はいつもとても難しい判断です。「1年生の子だったらここまではできて当然」という思いと、「生活習慣が身についていく速度は子どもによって多少の個人差はあるのだから、焦ってはいけない」という思いが拮抗して、苦しんでおられることと思います。「できて当然なのに…」という不安は、周囲の同年代の他の子どもと比較したり、子どもがほぼ順調に育っている先輩保護者からアドバイスを受けたり、ある種の育児書を読んだりすると、いやおうなく生じてきます。しかし、同年代の子や育児書を基準にして子どもを急き立てると、母子の相互作用が悪循環をきたし、余計に発達を阻害してしまいがちです。ですから、「できて当然なのに…」という思いを頭の片隅に置きつつも、基本としては「焦るまい」と自らに言い聞かせながら、子どもに接するとういと思います。同年代の子たちと比べるのでなく、一年前の彼の姿と比べてみてください。そして、少しずつできるようになっていく彼をほめてあげてください。1回叱る前に9回ほめなさいとよく言われますが、これは逆におかさんにとってハードルが高いだろうから、1回ほめる前に9回叱っていた自分が、8回叱るものの2回ほめることができたときに、自分をほめてあげることも大切です。

具体的に「おもちゃの片付け」については、片付け方がわかっていないということはありませんか。種類ごとに整理して片付けないといけないのか、おもちゃ箱に放り込むだけでいいのか、子ども自身がわかっていないこともあります。現在の子どもの発達段階に合わせて、「こういう風にやればいいよ」と見本を示しながら何度も一緒にやってみるといいでしょう。また、片付けやすいおもちゃ箱を用意するなどの工夫も、やる気にさせる効果があるかもしれません。

「歯磨き」については、虫歯ができて痛い思いをしたとたん磨くようになった子もいます。絵本やDVDなどを利用し、歯磨きの意味を何度もわかりやすく伝えることも効果的でしょう。また「歯磨き」が十分にできていないことが気になるようなら、まだ1年生なので、仕上げ磨きをしてあげるといいでしょう。仕上げ磨きの場合は、工夫すれば、母と子の心地良い触れ合いを演出する場ともなります。仕上げ磨きの前に自ら進んで自分磨きをするようになれば、ほめてあげるといいでしょう。

### 3. 教師と「叱ること」

保護者向けの「心の相談会」ののち、A小学校より「叱ること」についての教員向け研修会の依頼を受けた。依頼文は以下の通りである。「教師は子どもを叱

らなければならない場面があります。その子にとって絶対にしてはならないことについては、厳しく強く叱ることもあります。しかし、子どもの心に届かず、悩んでしまうことが多いです。そこで、教師の叱り方や叱る場面についてお話いただけたらと思います。職員にどのような場面で悩んだことがあるかというアンケートを行い、具体的な事例をいくつか出させていたきたいと思います。」

筆者は、アンケート結果を参考にしつつ、研修会用の原稿を作成した。以下の文章は、その原稿をもとに、当日の教員とのディスカッションを踏まえて、またその後の大学の授業での学生たちの意見をも踏まえて、加筆修正したものである。

#### ①「叱ること」と私

今回の研修会のテーマは「叱ること」です。「臨床心理の専門的な見地から心の状態や発達段階について学び、教師が子どもを叱る場面や叱り方についてよりよい方法を研修し、今後の指導に役立てる」との目的もいただきました。昨年の保護者向けの講演会で『おこだでませんように』（くすのきしげのり作・小学館）を紹介したことが、このテーマの呼び水になったのかもしれませんが、保護者のみならず先生方にとっても「叱ること」は心にひっかかる難題なのでしょう。

しかし、このテーマを与えられた私は、果たして自分がこのテーマの講師としてふさわしいのかどうか疑問を抱き、悩んでいます。先日も、義務を怠った学生を研究室に呼び出して、「叱った」つもりなのですが、「先生、もっと叱ってください。先生やさしいから」と言われてしまいました。教員志望の学生にさえ「叱れない」と見なされている私が、一筋縄ではいかない小学生相手に日々奮闘されている先生方のお役に立てる話ができるかどうか心もとない思いです。しかし、「叱ること」は教育にとって大切なテーマだと思いますので、この際考えてみたいと思い、お引き受けしました。

私はあまり「叱らない」人間と学生には見なされているようですが、全く「叱らない」人間かというところではなく、家庭でも大学でも「叱って」います。小学生の息子を習い事に車で連れていくとき、出かける前のいさかが車の中で再燃し、「出てけ！」と怒鳴って歩道を通る人にびっくりされたこともあります。感情のままに怒鳴ったので後味のいいものではありませんでしたが、そのときぐっと感情を抑えて我慢をしていたとしたら、それはそれで不快な澱（おり）のようなものが心の底にたまったのではないかと思います。その日の習い事の帰り道、車の中では二人とも一言も話しませんでした。帰宅後、私は妻に、息子も妻にそれぞれ車の中の出来事を話し、そのあと妻の仲介で仲直りしました。

## ②叱ったあとの失敗感を分かち合う

「叱ってはみたがうまくいかなかったなあ」ということは、家庭場面でも学校場面でも誰もが日常的に経験することではないでしょうか。そんなとき、自分の気持ち（失敗感）を誰かと分かち合えるかいなか、その失敗感からの回復に大きく関わっているように思います。やむなく叱ったあとの感情のしこりを誰かに話すうちに、少しずつ冷静になっていきます。「ちょっと怒りすぎたかな」とか、「いやな気分にはなったが、あそこで叱ることは子どもにとっても大切なことだったんだ」とか、自分の行動を振り返ることができます。

「叱ること」でうまくいかなかったなあと感じた先生は、同じ学年の先生でもいい、特別支援教育コーディネーターでもいい、養護教諭の先生でもいい、誰かに話してみてもはどうでしょうか。話を聴く側は、まず話し手の話をそのままに聴き、評価しないことが大切です。聴いているうちに話し手が自分から答えを見出していくような聴き方をするのが理想です。しかし、聴いてもらうだけでは話し手が満足しない場合もあるでしょうから、求められたら何か感想を付け加えるといいでしょう。それは、「～しなさい」というアドバイスではなく、「～というやり方もあるよね」などのヒントのほうがいいでしょう。他人からのアドバイスは（特に上司からのアドバイスの場合は）、実行しないといけないというプレッシャーを感じるものの、なかなか実行できないものです。ヒントならば、話を打ち明けた先生の指導法の引き出しを増やすことにつながるし、アドバイスほどのプレッシャーを与えることもなく、悩む先生の心を軽くします。

しかし、叱って失敗したことなど、他の先生に言えないという思いもあるかもしれません。教員評価制度が導入されたことにより、失敗感を同僚に打ち明けることがマイナスの評価につながるのではないかと、との疑心暗鬼が生じるのです。そのようなことが起こらないためには、失敗について反省し、それを通して学ぶことの価値を認める学校文化を、管理職をはじめとした職員全員が作り上げていくことが求められます。ですが、それは一朝一夕にできるものではないので、同僚に心理的な支えを求めることのできない場合、家族や友人にほそほそと愚痴することも許されるのではないのでしょうか。

## ③叱られたらもちろん子どもも苦しむ

「叱る」ことで失敗感を感じている先生だけでなく、「叱られること」でしんどくなった子どものフォローを学校全体で考えることも大切です。「叱ること」で先生も悩むけれど、「叱られること」で子どもも苦しむのです。苦しみの表し方は、黙ったり、ふてくされたり、攻撃的な行動に出たり、子どもによって千差万別でしょう。私と息子の例で言えば、息子は私に叱ら

れて、自分にも言い分があるので素直に謝りたくないが、同時に私との関係を修復したいという思いをもっていただと思います。学校場面では、お互いに冷静になったときに担任の先生が叱られた子をフォローするといのですが、子どもがかたくなになって、そうはうまくはいかないこともあるでしょう。そうした場合に、誰か他の先生が、「X君の気持ちもわかるが、あの子の君の行動は間違っていたと思う。Y先生（担任）の気持ちもわかってあげようよ。それとも、何かY先生に伝えたいことがあるかい？」などと二人の間を仲立ちするやり方もあります。「叱られる子」をみんなで異端視するのではなく、叱られて落ち込んだ子を励まし、適切な行動に導くようなクラスの雰囲気作りを普段から心がけておくことも大切だと思います。もっと単純に、「最近元気なさそうだけど、何かあるの（あったの）？」などと誰かが声をかけるだけでも、叱られてすさんだ心を癒すきっかけになるかもしれません。

## ④子どもの変容についていけない大人たち

ここからは、先生方からのアンケート結果に基づいて話を進めていきましょう。

（教師の悩み-1）

叱る時にうまくいかないことは日常茶飯事です。最近の子で思うことは、優しく言っているうちはダメで、こちらが本気で注意しているのだという姿勢を見せないと伝わらない。それにはものすごくエネルギーが要ります。できれば叱ることは避けたいと思うのですが、よくわかるように言って聞かせることが大事だと思いますが、最近の子は言語を理解する力がなくなってきているようにも感じます。

私は小説を読むのが好きですが、どの時代の小説を読んでいても、年配の登場人物は若い世代と自分の時代の意識のギャップを語り、「昔はこうではなかったのに（近頃の若い者は）…」と嘆きます。そうした述懐は真実を含んでいますが、それがそのまま事実であるとしたら、小説というものが生まれてから千年以上の間に、人間は大きく退化し続けているということになるでしょう。しかし、実際の人間は、社会の変化につれ、進歩している面もあれば、退化している面もあるのです。そうした観点から、「最近の子は言語を理解する力がなくなってきている」という言葉を考えてみましょう。

「言語を理解する力がなくなってきている」としたら、なぜなのでしょう。言語は人と人とが生身に触れ合うからこそ発達するものですが、ゲーム機や携帯電話がのさばる現代の子ども環境は、生身の人間が対面して言葉を交わす機会を少しずつ奪っているのかもしれない。だからこそ、「よくわかるように言って

聞かせる」ために、「ものすごいエネルギー」を使って叱らなければならないのでしょう。

一方、「言語を理解する力がなくなってきている」とは、私たち大人が子どもたちの「言語（表現）を理解する力がなくなってきている」ことの裏返しかもしれません。私自身、大学の教員になりたての20代の頃は、学生をめぐる世界を理解するのにあまり苦労しませんでした。40代の今では携帯電話の世界、ツイッターの世界など私にはよく理解できない事柄が多くなっています。世の中が急速に変化していくなかで、大人が子どもの世界を理解することは難しくなります。自分が子どもの頃にはなかった様々なモノに囲まれて子どもたちは生きているので、それらのモノを子ども時代に体験していない大人たちは感情移入が難しいのです。子どもたちは、私たちが当たり前ものと感じ、獲得してほしいと願う技能を身につける代わりに、日々新たに出現するモノたちに適応しようと無意識的に努力しているのかもしれない。つまり、子どもたちは、私たち大人の「言語を理解する力がなくなってきている」かもしれないけれど、その自分たちの言語（表現）を発達させているかもしれないと、大人の側が子どもの真の姿を謙虚に見つめてみることも必要なのではないでしょうか。

「叱ること」は大人の価値観を子どもに伝えることでもあります。大人の価値観と子どもの価値観に齟齬が生じているとき、「叱ること」はより難しくなるでしょう。それでも人として守るべき普遍的な価値観はあると思います。相対的に許容すべき子どもの価値観を尊重しつつ、絶対的・普遍的な価値観は譲らず伝える倫理が求められると思います。

#### ⑤子どもの言い訳を封じてはいないか

(教師の悩み-2)

音楽の授業で歌もリコーダーも何もやろうとしない子に対して注意をしましたが、反抗的な態度だったため、授業後残して話をしました。何がよくなかったかを話し、何か理由があるなら聞こうと思いましたが、すねてふてくされ、何も聞こうとせず、話もできずに終わってしまいました。

この先生の体験とは異なるかもしれませんが、大人が子どもを叱るとき、子どもが言い分を語る前に大人が説き伏せようとしてしまうことがあります。「何か理由があるなら聞こう」と言い分を聞く姿勢を見せはするのですが、その前に理詰めで行動の是非を説くものだから、子どもが何とか用意していた稚拙な言い訳は行き場を失ってしまうのです。稚拙な言い訳に過ぎないにしても、それを伝えることによって、子どもは自分の言動を振り返ることができます。しかし、あまりに理路整然とした説教を前にすると、何を言っても

無駄だと感じ、感情の捌け口は閉ざされてしまい、「ふてくされる」ことになってしまうのです。

稚拙な言い訳を妨げずにじっくり聞いた後に、「じゃあ、あなたはどうすればよかったと思う？」と尋ねると、望ましかった行動について自ら素直に考えることができます。望ましい行動が本人にもわかっていないとすれば、次からはこうすればよいと本人に教えることもできます。

ところで、「何もやろうとしない子」に対する教師の働きかけのヒントを与えてくれる絵本に、『てん』（ピーター・レイノルズ、2000）があります。おえかきの時間が終わっても、主人公のワシテの紙はまっしろで、彼女はふてくされています。そんなワシテに先生は「なにかしるしをつけてみて。そしてどうなるかみてみるの」と声をかけます。そのしるし（てん）を先生はかけがえのないものとして尊重します。それがきっかけでワシテは自分から動き出します。ちょっとした働きかけが、子どもの心を劇的に変えていく様子が、鮮やかに描き出されています。

#### ⑥叱ることができない悩み

(教師の悩み-3)

厳しく叱ることができないのが悩みです。

若い先生に多い悩みかと思います。小学校実習から帰ったばかりの教育実習生からも、「子どもをうまく叱ることができず、友達感覚になってしまうことがあった」「生活指導をするとき、厳しく叱るべきか、そうするべきではないかで悩んだ」などの声を聞きます。

週1回小学校で発達障害児の支援をするボランティア学生を派遣する際にも、「たとえ補助であろうとも、子どもにとっては先生であることを忘れないようにしよう」と伝えます。学生ボラも若い先生も子どもと年齢が近いだけに、子どもはおにいさんおねえさんのような親しみを感じ、ベテランの先生とは趣の異なるよい関係を築けることもあります。若さゆえに子どもに慕われるのはいいことです。しかし、自分は先生であるというアイデンティティが形成途上にあるため、子どもに見透かされてなめられてしまうことがあります。背伸びする必要はありませんが、自分は子どもたちに価値観を伝える役目をもった教師であるとの自覚のもと、真摯に子どもと向き合うことが大切なのです。

一方、ベテランの先生の場合、厳しく叱ることに徐々に慣れていくわけですが、子どもが言うことを聞くのに味をしめて、悪くすると子どものおびえに鈍感になっていく怖れがあります。巡回相談等で授業参観をしていて、何か自分の価値観にそぐわないことがあるとすぐにいきり立って怒鳴りつける先生を見るのは気持ちのいいものではありません。「厳しく叱ること」

がすべてではありません。「厳しく叱ること」なしに指導が成立すればそれに越したことはない、という考えも一つの可能性ではないでしょうか。

かくいう私も「厳しく叱ること」ができない人間です。で、「厳しく叱る」前にいろいろなことを試してみます。大学で担当したある授業で、どうしても私語のやまないクラスがありました。何度か穏やかに注意しても、あまり静かになりません。子どもの頃のADHD傾向が大人になってもしゃべることのコントロールが効かないことに残っているような女子学生がその大元であるように思えたので、その女子学生を個別に呼び出して注意を与えました。ですがその次の授業でも、授業中の私の言葉から連想したことを隣の学生に話しかけることに始まり、脈絡なくおしゃべりが続いていきます。私は悩んだ末に、そのまた次の授業において、マジックで大きく「サイレントタイム」と書いた紙を密かに用意しておきました。そして、女子学生のとめどないおしゃべりが始まった頃を見計らって提示し、みんなが紙に注目して静かになったところで、「これが視覚的支援の一例ですね」と全体に説明しました。このやり方は、口頭での注意よりも効果的でした。

学生を厳しく叱ろうと決意し実行する場合もありますが、そういう場合はできる限り個別に研究室に呼び出して叱ります。学生のプライドを守るために、みんなの前で叱るよりも、二人きりの場面で叱るほうを選ぶのです。これは大学という環境ゆえに可能なのかもしれません。小学生も高学年になればなるほど他人を意識するので、彼らのプライドにも配慮する必要があります。みんなの前で叱られると、「不当に恥をかかされた」という恨みにつながるがあります。

「厳しく叱ることができない」と感じている先生は、無理に「厳しく叱ること」をせず、まずはその人なりの試行錯誤を重ねていけばいいのではないのでしょうか。そうしたなかで、どうしても許せない行為に遭遇したとき、確固たる自分の価値観のもとに厳しく叱ればいいわけで、そのほうがメリハリのある叱り方になるでしょう。「厳しく叱ること」が苦手な先生が、他の「厳しく叱ること」の得意な先生と同じようなことをしようとしても、子どもたちからは単に「キレイやすい」先生と見なされて敬遠されるだけかもしれません。

#### ⑦発達障害児への特別な叱り方はあるのか

(教師の悩み-4)

1年生の担任です。4月から叱ったり褒めたりして多くの子が成長してきたと感じます。しかし、何度注意しても同じことを繰り返す(離席する、話を聞かずしゃべり続ける)子がいます。何を叱られているのかが分かっていないと思います。その子は発達障害であ

るという診断は受けていませんが、視線が合いません。こういう子どもへの話し方を教えてください。

ある特別支援教育コーディネーター研修会で話をしたとき、生徒指導を熱心に行っていたコーディネーターの先生から次のような質問を受けました。「彼らの行動の原因は、わがままなのか、それとも発達障害なのか。わがままだったらしっかり指導しないとイケないし、発達障害だったら仕方がないとあきらめるのだが。どう見分けたいのか」。私は、発達障害であろうとなかろうとしっかり指導しなければならないが、発達障害が疑われる場合は配慮が必要だろう、と答えました。しかし、配慮が必要だとは言っても、定型発達の子(発達障害児以外の子を指す)への叱り方がそれぞれの子の個性に配慮したものになっているのと同様に、発達障害を有する子への叱り方もその子その子に合ったものでなければなりません。発達障害児としての特性よりも、その子その子の個性のほうが強いからです。そういう意味では、発達障害を有する子への特別な叱り方を追求するのはあまり意味のないことかと思えます。

しかし、発達障害が「発達」障害と言われるのは、何らかの機能に「発達」の遅れがあるためであるから、その発達の遅れを考慮した上で叱ることは大切だと思います。たとえば例示された児童の場合は、「何度注意しても同じことを繰り返す」ことから、「人の言葉を理解し」、「それを記憶し」、「それを踏まえて実行する」ことに遅れがあると考えられます。「人の言葉を理解することの遅れ」への援助としては、「ゆっくりと、簡単な言葉で、はっきりと話す」ことが考えられます。「記憶することの遅れ」への援助としては、「伝えたいことを紙に書く、視覚化して示し、いつでも見ることができるようしておく」などが考えられます。「それを踏まえて実行することの遅れ」への援助としては、「あるべき姿を先生がモデルとして示す、本人ができるまでまずは一緒にやってみる」などが考えられます。

「視線が合わない」のは、発達障害児、とりわけ自閉症児の特徴です。私が勤務する発達支援相談室にも多くの自閉症児が遊戯療法に通ってきており、彼らは最初セラピストと目が合いませんが、プレイルームの中で楽しい体験を重ねていくうちに、目が合うようになっていきます。「視線が合わない」のは担任の先生の責任ではありません。しかし、信頼関係の成立とともに、彼らなりに目が合う瞬間が増えていきます。その瞬間を楽しみながら、関係を育んでいくことが、自閉症圏の子どもたちと視線を合わせていくための、遠いようでより近い道のりだと思います。

#### ⑧それぞれの子どもに応じた叱り方

(教師の悩み-5)

それぞれの子どもに応じた叱り方をすると、周りの子から「対応が違う」と言われてしまうことに悩んでいます。

(具体的にどういう状況か、研修会の場で質問者に聞いたところ、質問者は高学年を担当する若い男性教師で、クラスの男子から、「先生は、女子に対して叱るときと、男子に対して叱るときで口調が違う」との不満の声が上がったとのことであった。)

若い男の先生が、女子にはやさしく諭すが、男子にはきつく叱るのを見ると、男子からは「先生は女子にあまい」との苦情が出てくることは理解できます。第三者から見ても叱り方が確かに不公平である場合、先生は子どもがそのことに気づかせてくれたと謙虚に受け止め、修正していくべきでしょう。子どもは先生のことを信頼していなければそうした訴えもないでしょうから、ある意味では子どもとの関係ができていていると考えてもいいかもしれません。

一方で、先生からみて子どもの言い分がおかしいと感じることもあるでしょう。この例で言えば、いくら男女平等とは言え、男子に対する物言いと、女子に対する物言いは、多少違って当然ではないか、と思う場合などです。その場合、先生はまず苦情を訴える男子にどうしてそう思うかを尋ねた上で、率直に自分の思いを伝えてみてはどうでしょうか。「そうかなあ。差別はしてないつもりなんだけど。お前ら男子へのほうが厳しく思えるのかなあ。だけど、おれ(先生)がお前ら男子に女子へ話すみたくに話したり、逆に女子に向かってお前ら男子に話すみたくに話したら、ちょっと変じゃない？」など。

(この研修会の元原稿を大学の授業でのレポート課題とし、感想を求めたところ、以下の反論が女子学生からあったので付記する。)

「ここでは男女別の叱り方に肯定的であるが、私は教員が少し配慮すべきだと考える。私は大学でジェンダーについて学んだが、学校の先生による男女別の対応は、私は女だから、俺は男だからという社会的性別の役割を固定化してしまう怖れがある。生物学的に男女に違いがあるのは明らかであり、男女という分け方に否定的なわけではないが、男子にはきつく、女子にはやさしくというのは、大人からのジェンダーの押しつけであり、必要以上に性差を強調してしまうように思う。前項で「発達障害児としての特性よりも、その子その子の個性のほうが強い」とあるように、男だから、女だからというくくりで見ること、その子本来の個性や良さを見失いかねないと思う。」

(この学生のレポートを読んで、筆者はなるほどと感じた。筆者は「自分の気持ちを正直に伝える」という意味で書いたが、その正直な思いが、(筆者も含め)教師のジェンダー観の偏りを露呈させてしまい、子

どもに悪影響を与える可能性も考慮しておかねばならない。)

#### ⑨自分のことを棚に上げていないか

実際に子どもを「叱る」とき、学生を「叱る」ときに、気をつけていることがあります。自分のことを棚に上げていないか、ということです。私自身も、これまで数え切れないほど叱られたり、注意されたりしてきましたが、「よりによってあなたの口からそれと言われたくない」と感じるときは、相手の言っていることが正しいとしても、それを素直に受け入れる気にはなりません。教師など目上の者に対して子どもはあからさまな批判はしにくいので、大人は一般に子どものそうした感情に気づかないことが多いのではないかと思います。

たとえば、自らの不倫のために家庭を不穏にさせてきた父親が、高校生の娘が援助交際をしていることを知り、「ダメなものだダメなんだ！」と叱るとします。これを聞いて娘はしらけた気分になるでしょう。教師が叱るときに子どもが反抗的な態度を示す場合、この父親のように「自分のことは棚に上げる」姿勢を見透かされていることはないでしょうか。宿題の未提出は厳しく叱るくせに、自分の書類提出は遅れがちな先生。「勉強しないと将来困るぞ」と口癖のように言いながら、日々学んでいこうという姿勢が感じられず、授業に工夫が見られない先生。子どもの忘れ物は口うるさく注意するのに、自分は子どもの言ったこと、あるいは子どもに言ったことをすぐに忘れてしまう先生。そういう風に子どもに見なされている場合、厳しく叱ったとしても逆効果かもしれません。もちろん先生にも事情があるでしょう。学校現場がどれほど忙しくなっているか。学校現場に特別支援教育をはじめどれだけたくさんの新しい課題が持ち込まれているか。でも子どもたちはそんなことは知りません。先生たちの言動のなかの欺瞞と感じられる部分に反応し、「先生だってぼく(わたし)のこと言えるのか!」と心の中で叫んでいるのです。

私の主張は、先生たちはいかなる場合でも厳しく自分を律すべきだ、ということではありません。ある程度自分を律することができなければ教師には向いていないと思いますが、ほどほどでいいのではないかと考えています。ただ、自分も不完全な人間であるという自覚をもち、日々自分の言動を振り返り、反省しながらも、それでも価値観として子どもに伝えたい大切なことを「叱ること」を通して伝えていけばいいのではないのでしょうか。

完璧に自分を律することなど土台無理な話で、たとえ教師がそれを志し、子どもに同じことを要求するとしたら、教室も日常生活も息が詰まってしまうでしょう。それよりも、先生たちが自分の弱さも自覚しつつ、

ときには懸命に、ときにはほどほどに、しかし誠実に生きていく姿を見せていくことなかで、「叱る」という行為が生きてくるのではないかと思います。

### 参 考 文 献

- 河合隼雄、『臨床教育学入門』、岩波書店、1995年  
くすのきしげのり、『おこだでませんように』、小学館、2008年  
ピーター・H・レイノルズ、『てん』、あすなろ書房、2004年  
新堀通也、『臨床教育学の体系と展開』、多賀出版、2002年